

あ の と き の “ち ょ っ と い い 話”、今 ま さ に 進 ん で い る “新 し い 取 り 組 み”。
北 海 道 医 療 大 学 が、こ れ か ら 未 来 へ 向 か う 姿 を 探 る た め に、
本 学 の 歩 み を “知 る 人”、“つ く る 人”に、お 話 を う か が っ て い け ま す。



三 上 章 さん
(薬学部1期生)

本学卒業後、製薬会社勤務を経てサン調剤薬局を開業。サングループ代表取締役として、青森県を中心に26店舗の調剤薬局を展開し、製薬業、福祉事業も運営する。また、本学卒業生を中心に活動を行う後援会では会長を務めている。

チャレンジとコミュニケーションで、
未来の医療をつくらせてください。

やりたいことを、自分でやる。

国鉄職員として五稜郭駅で勤務していた父の影響から、北海道への憧れを持っていた私は、1974年、東日本学園大学(現・北海道医療大学)の1期生として入学しました。当時は薬学部のみ。教養課程は、今はなき音別キャンパスで、専門課程は、当別キャンパスで学びました。学生数は今よりずっと少なかったのですが、教養課程は全寮制ということもあり、仲間同士で議論を交わすなど、とても濃密な学生生活でした。また、先生方との距離も近く、晩ごはんをご馳走になったり、ご自宅へ遊びに行かせてもらったり、ときには厳しく叱ってくれたり。まるで家族のような人間関係の中で、深い愛情を受けて育ちました。

卒業後は、エーザイ株式会社に入社し、プロパーとして11年間勤務。病院の医療スタッフなどと交流する中で、ひとつの思いが浮かび上がってきました。それは、自分も患者さんと直接関わり、もっと患者さんの力になれる仕事がしたい、ということ。そこで、自分で調剤薬局をやろうと決意しました。銀行、建築事務所、職業安定所など多彩な現場で活躍する友人たちに、起業の相談に乗ってもらいながら、第1号の調剤薬局をオープンしたのは1988年。いつの間にか、30周年を

迎えました。現在は、26店舗の調剤薬局を、青森県を中心に展開しています。また、地元で栽培された生薬を使い、安全性の高い医薬品をつくるために製薬工場も設置。総合感冒薬「コールドナイン」が製品化されており、2018年夏には胃腸薬も発売する予定です。加えて、介護保険制度スタート時に取得したケアマネージャーの資格を生かし、グループホームも運営しています。

やりたいと思ったことは、やってみる。そんなチャレンジ精神が自然と身につけていたのは、いろいろなことにチャレンジできる大学の環境があったからだと思います。「音別～当別マラソン」がその象徴です。

離れていても、同じ大学の仲間。

1977年の夏、第1回学園祭が開催されることになりました。北の大地に足を踏み入れて4年。決して優秀な学生ではなかった私にも、濃密な学生生活を送らせてくれたこの新しい大学のために、私も何かできないだろうかと考えていました。そこで思いついたのが、「音別～当別マラソン」。両キャンパス間350kmもの距離を歩き切るという、今思うと大変無謀な企画です(当時も無謀だと思っていましたが)。しかし、思い切ったことをやれば、新聞記事などにも大学の名前が掲載され、宣伝効果が期待できると思っていました。企画コンセプトも、しっかりありました。音別と当別をつなぐ。物理的な距離は離れていても、みんな同じ大学の仲間だということを、後輩たちに伝えたいからです。

参加したのは、私が所属していた剣道部の部員を中心とする有志17名。もちろん、1日で350kmを歩き切ることには不可能です。学園祭スタートの1週間前に音別キャンパスを出発し、行く先々の街のお寺などに、寝床と食事を提供してもらいました。また、トラックの運転手さんたちの間でも話題になり、アイスキャンディーなどを差し入れてくれる人も増えて

いきました。たとえ無謀に見えることでも、強い思いでチャレンジすれば、必ず応援してくれる人があらわれるものです。そして、人とのふれあい、人の支えが、あれほどまで力になると実感できたことは、卒業後の医療人としてのキャリアにも生きている貴重な経験となりました。

結局、当別キャンパスにたどり着き、仲間や先生方の歓声に迎えられたのは、出発から10日後。学園祭最終日に、何とか間に合いました。1日目、2日目は辛くて何度も断念しようと思いましたが、10日目はむしろ元気いっぱい、ゴール後はどんなことでもできそうな気分でした。

情報技術に、かえられないこと。

大切な仲間や尊敬する恩師に出会い、学生時代にしかできないチャレンジを通して、医療とは何かを教えてくれた母校が、私は大好きです。卒業後も給料が出るたびにキャンパスへ足を運んだのも、起業後に医療大の卒業生を積極的に採用してきたのも、後援会の活動に全面的に協力してきたのも、すべてそんな愛校心からです。私たち北海道医療大学は、医療現場で即戦力となり、これからの医療をリードする医療人を育成し続けていく、ひとつの大きなチームだと思っています。

医療大の学生のみならず、そして、卒業生のみならず。学部学科を越えたつながり、そして、全国2万人以上となった卒業生のネットワークを生かして、できるだけ多くの人たちと出会い、語り合ってください。たとえ学部学科や年齢などは違っても、私たちはみんな、同じ大学で医療を学んだ仲間です。

そして、仲間たちとともに多彩な経験を積み、コミュニケーション能力の高い医療人をめざしてください。これからの医療現場では、今までは人が担ってきたさまざまな業務や役割がAIやIoTにかわっていくことでしょう。しかし、人にしかできないことがあります。それは、コミュニケーションです。病気を治したい、という思いを共有すること。それこそが、患者さんに感謝される医療につながります。そして、感謝された経験は、医療人として努力を続ける情熱になるはずですから。



三上さんが企画し、自ら中心メンバーとして350kmを完歩した「音別～当別マラソン」は、1977年当時の新聞にも取り上げられた。記事にも書かれている「母校の名を盛り立ててやろう」という企画の狙い通り、本学のバイタリティあふれる学生が注目を集めた。